

はじめに

吉野川は、阿波の国郡中の七郡を流域地域とし、大昔から阿波の象徴として流れ続けてきた。阿波の人々は、この大河の恵を受け続け、また時にはその暴威に苦しめられてきた。

近世に入ってから、吉野川は「阿波藍」を育て日本全国に良質の藍を提供してきた。江戸中期以後、阿波藍を使用して全国各地で織物の特産物が生み出された。日本の誇る美しい染めものは阿波藍を抜きにしては語ることはできない。吉野川の水は、日本の美の創造に大きな足跡を残したといえる。

現在、吉野川はその河口堰をめぐって、大きな議論が広がっている。この議論の最大の特徴は、多くの階層のさまざまな立場の人々が論争の輪の中に参加している点に求められるだろう。

吉野川資料研究会は、徳島の誇る吉野川の基本的資料を発掘・紹介する目的で平成三年に発足し、平成八年には明治十七年（一八八四）に吉野川の調査を行ったデ・レーケの『吉野川検査復命書』の現代語訳を出版した。

その後、吉野川を論じる時に必ず話題にのぼる江戸時代の基本史料が、古文書のままで解読されていなかったり、解読はされていても現代の人々が手軽に読めない文体のままであるのを、いま吉野川を考える人々に広く読んでもらえるようにと、研究会のメンバーで現代語訳を試みた。

現代語訳に当たっては、出来るだけ原史料にあたるようにしたが、一部は原史料が見当らず、活字本に頼らざるを得ない場合もあった。また資料を選ぶ過程で存在の知られていない史料の発見もあった。

本資料集の発刊に当たり、史料を快く提供していただいた所蔵者の皆さんに心からお礼を申し上げます。

平成十一年六月

吉野川資料研究会